

「環境教育」

尾崎 友紀

OZAKI Yuki

多忙な業務に追われ
環境教育は後回しに

「ペルーで行ってみたい場所はどこですか？」

こう質問されたとき、おそらく多くの人が、マチュピチュやナスカの地上絵といった世界遺産を思い浮かべるだろう。もちろんペルーを代表する観光地であることは言うまでもないが、青年海外協力隊の尾崎友紀さんは、それだけではなく同国の魅力について語る。「ペルーは国土の半分以上が森林に覆われていて、生物多様性は世界でも高いレベルにあります。生物の宝庫であるアマゾンや、栄養豊富なフンボルト海流も、ペルーの大きな魅力です」。

JICA Volunteer Story

PROFILE

東京都出身。大学では環境情報学部所属。在学中、東京都のNGO「ラムサールセンター」の事務局スタッフとして2年間活動。卒業後の2014年10月から、青年海外協力隊（環境教育）としてペルーで活動中。

「環境教育に対する意識を高める」

日本人観光客も多く訪れる南米のペルー。この国の自然保護区を管理する事務所に派遣されている尾崎友紀さんの任務は、環境教育を通じて、自然や生物を守る大切さを伝えることだ。世界に貢献したい、という尾崎さんの夢が動き始めている。



首都リマから南に約250キロ、太平洋に突き出た小さな半島の付け根部分に位置するパラカス。この町の国立自然保護区管理事務局・パラカス事務所に派遣されている尾崎さんは、現地の職員と共に、住民や子どもたちへの環境教育活動に取り組んでいる。パラカス半島と周辺の海洋・海岸には、フンボルトペンギンやアシカの一種であるオタリアなどさまざまな生物が生息しており、ペルー政府によって国立自然保護区に指定されている。また、多くの渡り鳥が飛来する湿地を擁することから、1992年にはラムサール条約にも登録された。

同事務所には、生物学や観光学を専門とする20人余りの職員が勤務している。保護区内の巡回や生態系の調査、環境を守るための普及啓発活動などを行っているが、「環境教育の優先度は低い」と尾崎さんは話す。「職員はパトロールや生態調査で忙しく、例えば環境教育の授業を行う日でも、予定されている時刻に、事務所の車が全ての業務に使われているなんてことは日常茶飯事です。環境教育にあまりお金は掛けられないというところも、ある職員から言われました」。

尾崎さんの主な活動は、毎月、近隣の小中学校を訪ねて、環境に関するさまざまなテーマの下に授業を行うこと。テーマに合わせて、教材の開発や改善も行っている。また、夏休みには、公園や浜辺などで環境保全をテーマにした人形劇や映画の上映会を開催。子どもだけでなく、地元の民間企業や役場の職員などを対象に、保護区の重要性について伝える講義も行っている。

思いを実現させるための 味方になる

小学生のころから環境問題に関心があり、大学時代にはNGO「ラムサールセンター」のスタッフとして、湿地の保全に関するイベントやワークショップの運営をサポートしていた尾崎さん。今回の任務である環境



a.パラカスの自然保護区の海域に生息するオタリア
b.尾崎さんが手作りしたペンギンの実物大の模型
c.小学校の団体訪問の日、尾崎さんは子どもたちに野鳥の解説をした
d.保護区のビジターセンターの入口には、普及啓発用のパネルを設置。より多くの人に関心を持ってもらえるように、毎月パネルの内容を更新している

教育に関する経験は乏しかったため、最初は現地の職員からアイデアを聞き出すことから始めた。「同僚たちは時間に追われていますが、本当は環境教育に対する良いアイデアをたくさん持っていることが分かりました。私にできるのは、彼らの味方になってそのアイデアの実現を手伝うことです」。

心掛けているのは、なるべくお金を掛けないように、無いものは作る。こと。動物の生態について授業で教えた際には、ペンギンの模型を作成した。「材料にスポンジを使ったのですが手に入らなかったため、裏紙や雑誌などを丸めて作り直しました。形はでこぼこしていて不格好ですが、ペンギンの実寸が明確になれば問題ありません」と尾崎さんは話す。

また、忙しい同僚が環境教育に取り組みやすいように、鳥の個体数調査に同行したり観光客を案内したりと、環境教育以外の仕事も手伝っている。尾崎さんは、「新しい仕事を振ってくれないと嘆くのではなく、興味があることや勉強したいことを、自分から積極的にアピールするように心掛けています」と話す。

尾崎さんが同僚の味方であり続けたことで、環境教育活動の幅は次第に広がってきている。赴任から1年が過ぎたころ、同僚のパトリシア・サラビアさんが、「去年は実現できなかったことが、今年はある程度のおかげでできる」という言葉を掛けてくれたという。尾崎さんと一緒に環境教育に取り組んでいくうちに、相手の目線に立つことを意識するようになったサラビアさん。小学校の授業では、写真や映像を見せたりゲームを取り入れたりしている一方、企業や役場の講義では、より専門的な内容まで踏み込んだ話をしている。

任期が残りの2カ月となった尾崎さんは、「ヒト・モノ・カネ、現地にとって何を残すのが良いのかを考えたとき、最も重要なのはヒトだと思っています。同僚、職場、そして町全体を巻き込んで、環境教育を展開できる『ヒト』をもっと増やしたいです」と、2年間の活動の成果がその先も継続していくことを強く望んでいる。



小学校でペンギンの生態について教える尾崎さん。石を使って実際のペンギンの重さを体感させている